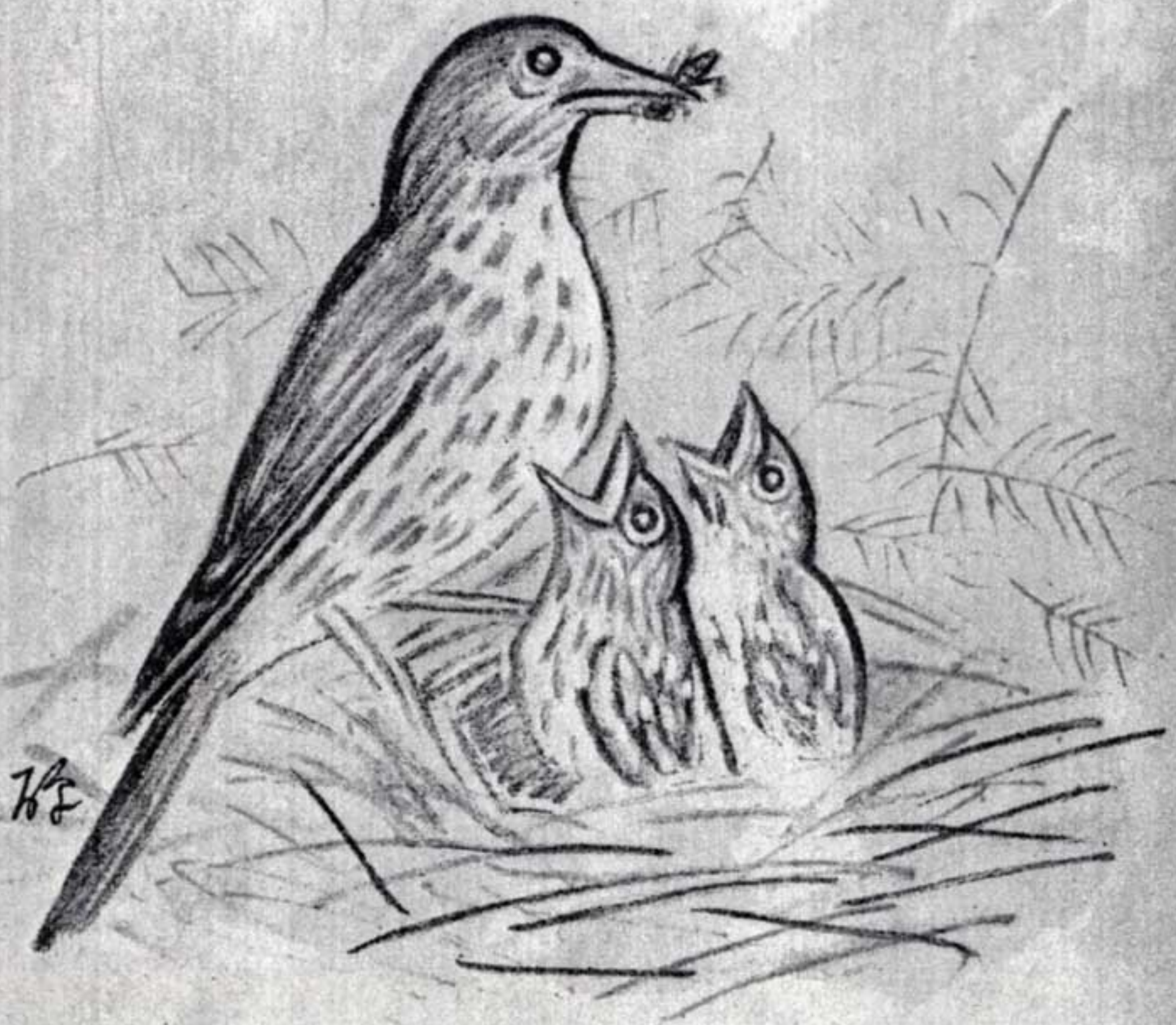


土 淨

五月號



安西覺承著

法然上人の和歌

B6版六十四頁 定價五十錢 送料六錢

上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺徳の結晶をみる。

増谷文雄著

行誠上人

B6版二百三十頁 定價一圓五十錢 送料十八錢

近世不世出の高僧、謹嚴にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

林 靈 法著

法然上人を憶ふ

B6版四四〇頁 實費三圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遂に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつづつた。

(本會で取次ぎます)

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢増○

浄土 五月號 目次

表紙・巻頭カット……………牧野 肆

和は戰勝の基……………(一)

五月の大氣……………吉田絃二郎(二)

前線防 空 壕……………小坂信教(五)

建 直 す 力……………佐賀一海(八)

小 銃 彈……………中野尅子(四)

信 仰 相 談……………(三)

歌 壇……………岩野喜久代選(二〇)

俳 壇……………太田耳動子選(二四)

法語 或る日の法悦……………中村辨康(二五)

編輯 後記……………(一六)

淨 土 第 十 卷 第 五 號

和

和は戦勝の基

戦つて勝つには三つの方法があるといふ。即ち敵の戦力を全滅するか、敵の全領土を占領するか、或ひは敵の戦意を喪失せしめることがそれである。しかし今までの戦争にその例をとれば、大抵は第三の場合であつた。味方が疲勞した時は、敵は更にもつと困憊してゐるのである。味方の艦船が七分損傷したと感ずる時は、敵が七分で味方が三分の損害だといふ。従つて戦争の勝敗は僅かな差のことが多く、その決を定めるのは戦意の如何にある。それだけにわれ／＼として最も心すべきは思想戦であり、恐るべきは謀略戦である。

總ゆる方面ですでに戦闘配置についてゐる。各府縣の宗教報國隊は續々と嶺山や工場に進出し、また僧侶勤勞動員によつてか、自發的にか何れにしる多くの僧侶が工場で勇躍ハンマーをふるつてゐる。しかしこれですべてが完了したとは思へない。なるほど人は夫れ夫れ配置についた。が配置について、それが十二分の力を發揮してこない内は何んにもならない。各々一人一人が、或ひは一つの工場が全能力を擧げつゝあるとは思へない。

「百發一中の砲百門は、百發百中の砲一門と同じである」の名言通り、今や一騎當千の士を最も要求してゐる。それにも拘らず若し八分なり九分なりの能力しか擧げないものが一人でもあれば、その影響する所は甚だ大きいと云はねばならない。こゝう考へる時、各人に全能力をあげさせ、工場が張ちきれぬ力をもりあげてくるには、先づ第一に人の和である。和を以て貴と爲し、忤ふることなきを宗と爲す。の聖徳太子の御言葉ほどわれ／＼の胸に迫るものはない。人の和あれば何事も出来るのである。そればかりでない、外からの如何なる謀略も遂に效を奏さず頑敵も敗退せざるを得ないのである。戦勝の基もここにありと信じるものである。

五月の大氣

吉田 絃二郎

いつの間にか石南花が咲き、山吹が咲くやうになつた。庭の新緑のかゞやきにつまれつゝ一服の茶を喫する朝の清爽の氣は、曰く言ひ難き妙心境である。

それにつけてもこの苛烈な戦さのさなかに靜かに一碗の茶を喫することのできるありがたさを、今日ほど身にしみて感じることはないであらう。茶を喫しつゝもわたくしは哨戒中の飛行機の爆音を聴く。北邊に、南方に晝夜の別なく敵機を監視しつゝある人々の姿が泛かんで来る。

今朝の茶は今朝限りの茶である。今生たゞ一度の茶である。今生最後の茶であるかも知れない。さういつた突き詰めたところになつて一碗の茶を喫することのできるのも、戦さのさなかに生きておればこそである。まことにこの頃の朝の一刻は限りもなく尊い。

富といふもの、官位といふものが人間の心を汚れさせてゐることは歎はしいことである。誰れも貧からんよりは富まんことを欲し、身卑しからんよりは貴から

んことを欲するであらう。しかしそこに誘惑がある。富まんことを欲するがゆゑに貪慾となり、貴からんことを欲するがゆゑに權門に媚び、節を屈することになる。貧を樂しむもの、卑しきに安住するもののみ、まことの人生を知ることが出来る。古來すべての聖僧たちは一鉢一笠の姿であつた。

このところ國家存亡の秋に際して、不純な財寶を積み重ねようとする人たちの不徳を憤る前に、その愚を憐まざるを得ない。萬一にも、左様な猶太的な人間のために戦さに不利を招くやうなことがあつたとしたら、かれ等は巨萬の富を擁いて何うするつもりであらう。

たゞ欲しいのは心の友である。友に於いて富まんことである。支那の古畫を展すると、雲につつまれた秀嶺、飛瀑の下に或は琴を弾じ、或は茶を煎る所謂高士の清交を觀ることが出来る。高士の交りこそ、人生に於ける最高の富でなければならぬ。高士の交りこそ世



界の何ものにも替へがたき富である。

書を読み、人生を尊び、人生を敬愛し、人生のために忍び、人生の品位を高くする底の人こそ高士であり、このやうな人こそ眞の學者であり、眞の宗教家であり、眞の藝術家であり、眞の科學者である。かくのごとき高士を友とする者こそ眞に富める人であり、美望すべき人生の富者である。

戦局はますます苛烈さを加へ、戦さといふものの厳しさがいよいよ身近く感じられて来るにつれて、貪慾の徒はいよいよ貪慾となり、提婆の徒はますます俗人のあさましさを露骨にあらはして来るであらうし、人生の歸趨に迷ふであらう。

この際にあたつて迷はず、恐れず、人生を生きて行くことのできる者は靜かに讀書し、靜かに思惟し、靜かに名利の外に觀する底の哲人、宗教家、科學者でなければならぬ。

たゞ一人の吉川潔少將は、一驅逐艦長として敵の巡洋艦、驅逐艦、潜水艦十七隻を撃沈したではないか。たゞ一人の力の偉大さを思はざるを得ない。一人の哲人、一人の僧、一人の科學者も亦、一人の力の偉大さを實證しなければならぬ。

今日ほど大死一番といふ言葉が端的に感じられる時

代はない。空を翔る勇士たちは強かに大死一番の心境に在る。勇士たちにとつては既に死もなく生もない。神さながらの姿である。あの尊い姿を想ふにつけても、戦時下にふさはしからぬ俗念などかりそめにも存在させては相すまぬことである。

今日わたくしは多摩の田圃を歩いてゐた。白鷺の群が田に下り、千鳥も鳴き連れてゐた。今年はじめの行々子の聲も聴いた。

枯れ葦の間には尺にも足らぬほどの葦の新芽が頭を擡げてゐる。行々子は短い葦の新葉をめぐりて鳴き渡つてゐる。

行々子はかまびすしい鳥のやうに考へられてゐる。しかし限りもない五月の葦の原に鳴く行々子の聲は寧ろ靜かな旅愁をそゝるものである。

恐らく西行や芭蕉のやうな旅の詩人たちは、晩春初夏の旅の先々に行々子を聴いて、その詩腸を搔きみだされたことであらう。

水郷の初夏の情趣として、行々子の單調な鳴き聲はなくてはならぬものである。

あの何の曲もない、何の能もないやうな行々子の聲であるが、不思議に人の胸に訴へるものを持つてゐる。



る。

初夏の水郷にはなほ鷓鴣があり、鵲があり、水鶏がある。

鷓鴣を聴けば、わたくしは故郷の古城のほとりを懐ふ。初めて両親の膝下を去つて、異郷の學校に學ぶやうになつた春、少年の眼に映つたものは古城の濠に見た鷓鴣の姿であつた。

「人心一つなれば天下に敵なし」と

國民總躍起中央總會の雄叫び

前線の勇戦力闘に應へて銃後國民の闘魂を火と燃やし、その總力を戦勝の一點に集中するやう、五月十四日日比谷公會堂で國民總躍起運動の中央總會が開催された。この日東條首相は「人心一つなれば天下に敵なし、勝敗の決は氣魄にあり」と烈々たる所信を述べ、次の如き宣誓をなした。

宣誓

戦ひは愈々深刻を極め、皇國の興廢正に岐るるの秋なり。神兵の勇武は天地を震撼し、壯烈鬼神を哭かしむ。今や必勝の道は、前線に對應する國民總躍起あるのみ。茲にわれ等は、心を一にし、誠を盡し、身を碎き、骨を粉にし、以て戦力増強に邁進し、米英を撃潰して、誓つて聖慮に應へ奉らん。

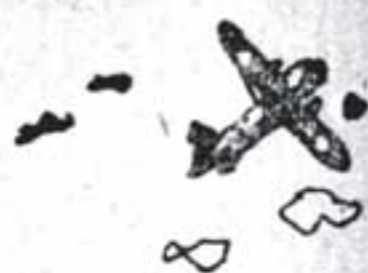
春の雨に煙つた古城のほとりに足をとめては鷓鴣の聲を聴き、少年らしい旅愁に父や母を懐うたものである。

芭蕉は雉子の聲を聴いて「父母のしきりにこひし」とうたつてゐるが、芭蕉も雉子の聲と父母とを結び付けた聯想を持つてゐたのであらう。

少年時代の純一無雜な心にきざみつけられた雉子の聲、鷓鴣の聲、鵲の聲、水鶏の聲を思ひ出すばかりにも、わたくしたちの心は淨められる。

三十年も前のことである。まだ彼方此方に葦に掩はれた水溜などがあつたころ下谷の龍泉寺に近く棲む醫師があつた。まことに人柄のよい、名國手であつた。水鶏を籠に飼つては、水鶏の聲に眼を細くしてゐた。清貧に甘んじ風雅の道を樂しむ名國手の姿を見るだけでも、大抵の病は癒えさうに思はれた。比較的短命で世を去つたが、今でもわたくしは水鶏のころになると、白隱禪師の觀音の軸の前に坐つて、水鶏を聴いてゐた名國手を想ふ。

清爽な五月の大氣は、悉くなつかしい少年時代の美しい詩の追憶と聯想に輝いてゐる。あわただしい戦時下、俗念を拂拭して、神のごとく純一な魂の世界に還るべきは五月の大氣である。五月の自然である。



防空壕

小坂 信 教

防空壕の中の心理と言ふものは面白いものです。私は〇〇島に滞在中、幾度となく空襲に會ひ防空壕にはいつたが、黙つて坐つてゐる者もあり、やたらとしやべる者もあるのであります。

第一回の空襲を受けたのは、〇〇島上陸後、恰度一週間目でしたが、此の時の様子が一番印象に残つてゐます。

上陸の夜は閑夜でした。宿舎の世話をして下さつた兵隊さんから、月夜になるとやつて來ますよ、翌と同じで月夜になると瘠ますよ、夜中幾回となくやつて來て寢せて呉れますからな、と聞かされました。

三日ばかりたつと月が出はじめ、一夜一夜と明るさを増して行きました。

臼田と矢部は其頃から寢られぬ夜が續き出したらしいのです。二人は一つ部屋にゐたのですが、夜中ふと目をさまして、此の部屋

には遅くまで燈りがついてゐるのです。そして朝は私や他の者が食事をする頃には熟睡の最中で、お晝前になつて、やつと起き出して來ると言ふ有様でした。

其頃は到着早々で特に仕事は無く、宿舎の整理や仕事場の準備、關係箇所への連絡などに日をすごしてゐました。

臼田は普段から無口で洒落や冗談は説明附きでなければ解らぬと言ふ男ですから、朝食と晝食とを兼ねた食事をすますと、自分の仕事の會計整理を夕刻まで黙々としてやつてをりました。

矢部の方は出発前から亂暴者の噂のあつた男なのですが、〇〇島に行つてからは、一層其の度が高まつた様で、これもお晝前に起き出して來ると、他の者達が仕事場の準備に忙しく働いてゐるのにも協力せず、ぶらりと町の方へ出かけて行つては、夕刻に歸つて來、

歸つて來た時にはもう相當にアルコールを入れて來てゐて、宿舎の裏庭で軍刀を引き抜いてバナナやパイアの木を伐り倒したりするのです。

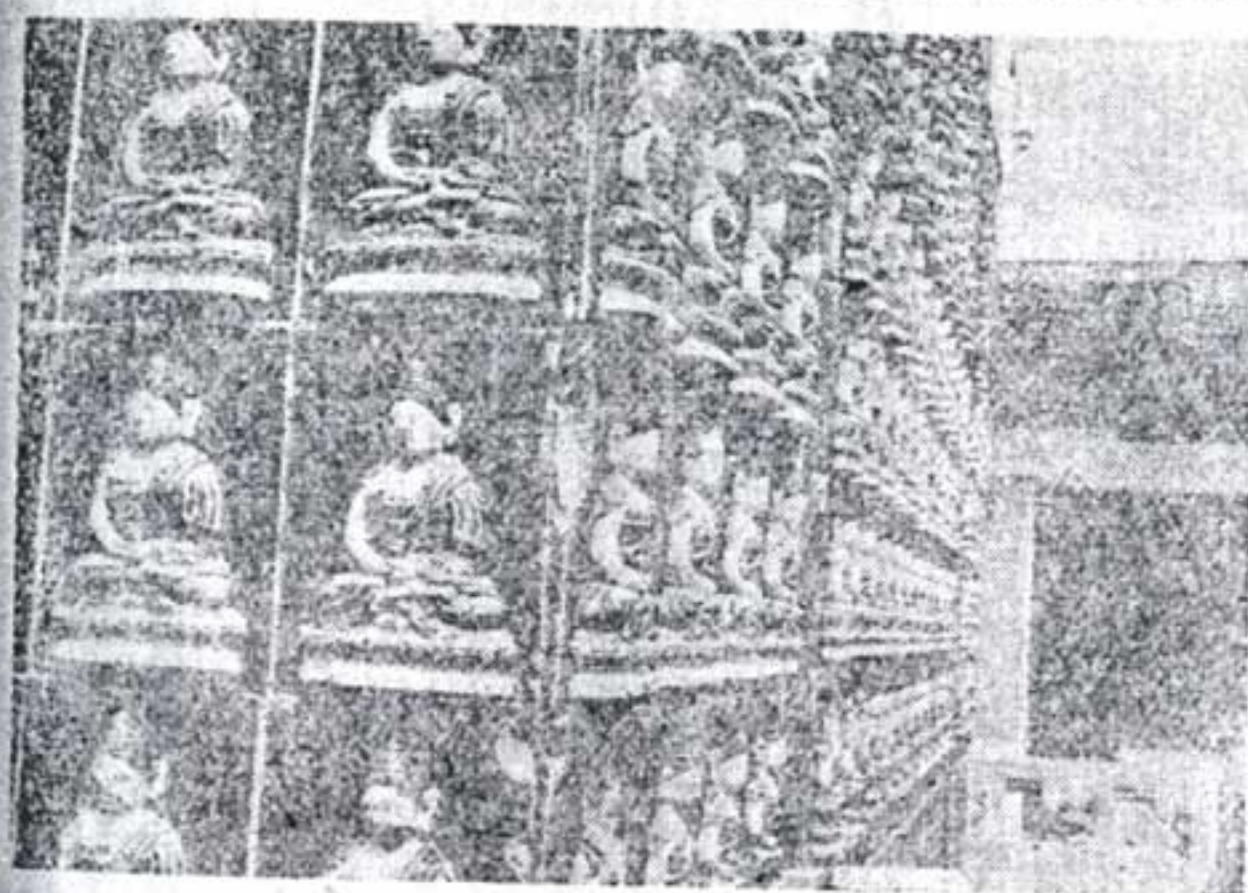
第一回の空襲に會つたのは夜の十時頃でした。私は既に床にはいつてゐたのですが、サイレンを聞いてすぐにベッドの上に取りかかると「來たな」とつぶやきました。かねて注意をされてゐましたので、靴下をはいて寢てゐましたから、すぐにズボンと上衣を着かえ、靴をはいて外に出ました。

洋服を着かえる事も兵隊さんから注意をされてゐたのです。

萬一爆撃で死んでも寢間着で死んでゐては見つともないから、と言ふわけなのです。外に出て空を仰ぐと月は皎々として晝間の様です。南洋の月の明るさは腕時計の針が讀める程なのです。

二三步あるき出して、フト宿舎の方を振りかえると臼田の部屋から燈りが洩れてゐます。

まだあるのかなと思つて、引きかえしてみますと、ベッドの上には寢間着がほろり出されてあり、蚊帳の吊手が一つ切れてダラリと



垂れてゐます。燈りを消して壕の方へ歩き出しました。尾端な話で恐縮ですが——幾分便宜をもよほしてゐる事に氣附きました。

我慢をすれば出来る程度ですが、壕までは百米位はありますし、空襲が長びくと困ると思ひ、すぐに又宿舎に引きかえしました。

電燈はつけられませんかから月光をたよりに便器に腰をおろしました。

甚だ勿體ない事乍ら、こうした姿勢のまゝで私は考へました。

法然上人様の二位禪尼への御返事の一節に「念佛の行は、もとより行住坐臥時處諸縁をきらはず、身口の不淨をきらはぬ行にて、易行往生と申し候なり」とありますが、南海の孤島でアメリカ機の空襲下に、かゝる不淨に入りて申す念佛は、上人様もお考へにはならなかつたらうなどと。

用をすませて防空壕まで行きましたが、それまでには未だ敵機は上空に來ませんでした。

壕の中は眞暗ですが、私達の仲間には皆來てゐました。私は一人々々名前を呼ぶ事によつてそれを確かめたのです。その他にも近くの兵士集會所に遊びに來てゐたらしい兵隊さん

もはいつてゐる様です。壕の中は狭い乗合自動車の様に向ひ合つて腰かけが出來てゐます。

誰かバツと煙草の點火器をつけて呉れました。その明りで一人分の空席を見附けて私は其處に寄り込みました。

火はすぐ消されました。壕の中の僅かの火は外に洩れる事は無いのですが、上空から見られる様な氣がして消さずにはゐられない氣持なのです。僅かの間の明りでしたから右隣りも左隣りも誰がゐるのやらわかりません。しばらくは沈黙が續きました。所々で煙草の火が生きものの様に明るく暗く光るばかりです。全員二十名もゐませうか。全部の耳が遠くの空にかすかに聞え出した爆音に欬てられてゐます。

爆音は漸次近づいて來ました。突然ドーンと地響きを伴ふ音響がきこえました。誰か低い聲で「灣口だな」と言ひます。灣口の海中に爆弾が投ぜられたらしいのです。

地響きが去つたと思ふ間もなく、爆音が頭上に低く轟々とひびきました。思はず頭をすくめる程の轟音です。誰かバツと足もとに臥せた様です。

狭い壕内の事です。膝と膝とがくつつけられて隣の者の體温がちかに感ぜられます。隣りの男の膝の顔えてゐるのが私の膝に傳つて來るのです。

轟音は去りましたが、或る程度の高高度を取つて頭上の空を縦断してゐる様子です。爆音



から判断して三機か四機はゐる様です。

そのまゝで時は過ぎ去つてゆきます。あちこちで小聲の話し聲がきこえ出しました。

「三機だ」と言ふのもあり「四機だ」と言ふものもあります。「千米位かな」と言ふかと思へば「いや、二千はある」と言ふものもゐます。

突然、大きな聲で「今日は敵に縁のある日だよ、晩めしにテキを食つたからな」と言つて「へへ、へへ」と笑ふものがあります。私の真正面の男です。敵の前一尺位のところで發した聲ですから、ギョツと驚かされた位でした。何處かで聞いた面白くもない洒落で

す。誰も笑ふ者はありません。しばらくすると、又同じ聲で「カツも一緒に食つておけば

良かったな、へへ、へへ」とやりました。やはり誰も笑ひません。敵に勝つと言ふ含みでせうか。

右隣りの男は相かわらず膝を頭はせ乍ら、スースーと鼻いきを荒くして沈黙をつゞけてゐます。

左手の方で誰か「シュツと燐寸をすつて煙草に火をつけました。壕内は面はゆい位の明るさに照らし出されました。

私は面をあげて前の者を見、右の者を見ました。前の者は臼田、右の者は矢部なので

す。臼田の真白い防暑服は胸からズボン一面、泥だらけになつてゐます。先程足もとに臥した時に乾く事のない壕内の土に汚れたのでせう。

私は、臼田が、矢部が、と意外の感にうたれて考へさせられました。先程不淨で考へた、法然上人

の御法語の御文に「念佛を申し候ふ事は、やうく／＼の義候へども、たゞ六字を唱ふる中に

一切の行はをさまり候ふなり、心には本願をたのみ、口には名號をとへ、手には念珠をとるばかりなり、常に心をかくるがきはめたる決定往生の業にて候ふなり」とあります。

佛の威神力を以てすれば、口に唱ふる稱名も心にたのむ本願も同様にお見通しであられませう。私は如何なる時にも場合にも、常に彌陀照覽の御もとにてなす身口意の業なりと考へて努めて來たつもりでした。これが「常に心をかくるが、きはめたる決定往生の業なり」に相當すると考へてをりました。依つて以つて、死ぬる時には死ぬるが良く、生きる時には生きるが良く、と受け取られてゐるつもりであつたのです。

しかるに、かゝる非常の時に會つてみると、果してそれだけの安心を得られてゐたであらうか。先程不淨に時を費した行動に就てはて——と自分自身を見直す氣持になつた事でありました。

軍屬、諏訪汎はかう私に語り、大空の彼方をみつめながら、「今夜も月はよささうですな」とつぶやきカラカラと笑ひました。



建直す力

——恩田木工の話——

佐賀 一海

訓をもつものと思ふ。——信州松代眞田四十萬石は由來富裕をもつて聞えてゐたが、九代將軍家重の頃には藩主眞田信安が人材登用の道を誤つた結果、悪臣相次いで藩政治を私し、そのうへ水害その他の天災がしきりに續いて財政は極度に窮乏、足輕の同盟罷業や百姓一揆が附加はつて藩全體が素亂の二字に盡きてゐた。そこへ藩主信安が薨じて後を襲うたのは當時十三歳の眞田幸弘である。この新藩主の聰明と英斷が、眞田家にとつて大きな幸福をもたらしこととなつた。

「日暮硯」に記された恩田木工の行蹟は、徳川幕府封建時代における一藩國の財政建直しであるが、戦時下耐乏生活が國民の必勝信念にしっかりと結びつけられてゐる今日、少なからざる教

家老職の末席に連なつてゐた恩田木工が勘略奉行（財政整理の奉行）の大役を命ぜられたのは、寶曆五年、木工三十九歳、藩主僅か十六歳のときである。十六と云へば昔は立派な一人前であるが、しかし自ら木工を拔擢した眼識には年齢で考へられぬ非凡なものが含まれてゐる。いつたいこの藩主の偉さは飼鳥の逸話に傳へら

れてゐる。或時、近習が殿様のお慰みにもと飼鳥を勧めた。許されて近習は三疊敷もある贅を盡した鳥籠を殿に献上した。幸弘は中に飼ふべき鳥の話はせずに、御膳番に命じて立派な料理を運ばせた。そしてその近習を籠に入らせ、それを與へて食せよと命じた。近習はお断り申しあげたが上の命令で仕方なく随つた。ところが食事がすんでも殿から「出よ」の仰せがない。近習が恐る恐る外に出られるやう申出ると、「いや出すことは相成らぬ。その中に一生ゐて、何なりと望み次第に取寄せ食させる、左様心得よ。」幸弘はつづけて、「何するも奉公。」と云つたまま取合はない。近習は困憊の驕句、同輩の誰彼に頼みこんで泪とともに幾重にも籠から出られるやう殿に懇願した。すると幸弘は、「苦しくば出よ。其方を苦しめて、われら慰みにする所存なし。これへ参れ。申し聞かす事あり。其方が屋敷にて平生住居する所、廣くして八疊かす

「鷹鷹なるべし。いま鳥籠三隻鷹あれば一人にて狭しとは云はれず。ただ『出ることならず』と云へば苦しがり、泪を流し、詭言するにあらずや。況や鳥類は天地の間を住居として虚空自在に翔け廻り心のままに食を求むるもの狭き籠に入れて食を與ふるとも彼の心に相應するや否や知れず。鳥類の苦痛は其方が難儀に思ふ何百倍やも料り難し。いかに鳥類なればとて、彼を苦しめて我が慰みになるべきや。よく合點して慎むべし。」とさとした。

幸弘十五歳の時である。「まことに生知安行の聖君、前代未聞の名將」とある。

さて木工は大役を引受けると、殿をはじめ他の老分の役々の面前で、自分の言行に對して「左様はならぬ」と非議めたこと一切をしないといふ誓詞を取った。そして自宅に戻ると、まつさきに親類を集めて申し出た。「此度の役、手前一生の浮沈、何れにも是非なき事と思召し、向後義絶なされ下さるべく、御意を得たし。」また妻子、家來共に對しては、

「此度の役儀に就き、女房には暇を遣はす。子供は勘當、家來共はいづ方へなり奉公誓すべし。」と云ひ渡した。

「皆が驚いて事由を問ひ直すと、先づ手前儀、向後虚言を一切申さざるつもり。」



り。然るに女房を始め子供、家來共、親類中も虚言申しては、木工の身内あの通りなれば、木工からして合點ゆかずと疑はれ申すべし。さす

ればこの大往來は止まらず。また、平調、平生と汁より外は、香のものも食べ申すまじき所存。その上、衣服も木綿と思へども、あるものを描きて新しく捲ふるも費えになる故、あつものは着て新調の節は木綿より外は着せざる所存。然れども皆の者は菜も喰べたかるべし、木綿も著にくかるべし。」と答へた。結局、一同は木工の提案に寸分も背かぬ誓ひを立てて彼から離れないことになったが、一國の大事は先づ身のまはりの固めから、といふ不拔の信念を、木工は實踐にうつしたわけである。そして諸役人に對しては、協力一致萬事儉約を説いたが、然し十萬石相應の入用は惜しまぬこと、各々の職高は本定め通りに支拂ふことを約束した。藩政改革に當つて木工の主力を注いだ點は役得で平氣で賄賂を取る役人の建直したつた。天災その他で庶民の疲弊もさることながら、たとへば足輕が千人あるとすれば年貢催促のため月々村々へ繰出す者はその九百人を數へてゐた。彼等は上への取立てを看板にして在方へ五日も七日も逗留する。そして散々勝手な振舞に及んだ。この足輕の年貢催促の風習による村々の入貢は、各村年貢高の七分までを占めてゐた。そこで木工は全村の代表者を集め、以後一

歌壇



岩野きく久代

京都 松村市三郎

病む窓に霜はきびしく玉碎の二字
眼射るけさの記事かな

評 傷夷軍人の詠である全員玉
碎の戦況を讀んだ悲痛と憤激
と焦燥の情を表面に表はさな
いで病む窓に霜はきびしくと
自然の凜烈さの中に情懷を託
して餘韻を残したところは凡
手でない。

小倉隊 鈴木 修吉

庭中に麥を踏みあるる少女よ二人
並びて樂しかるべし

評 女子挺身隊についての詠も
他に多くあつたがこれなどは
理に走らず肩ひち張らず、の
びやかに客觀的に眺めてゐて
却つて効果をあげてゐる。

愛知療養所 戸松 勝美

うつそみは主治醫にまかせ吾が心
彌陀にまかせて安けかりけれ
評 心にくくも涼しい安住境で
ある。羨ましく解脫ぶりかな

北海道 山崎ふじ子

をみなわれ銃は執らねどみいくさ
に鉄もてはげむ農人にして

新潟市 征 修二

汗にぬれ油にまみれ働ける少女は
兵にあに劣らめや

舞鶴 齋藤 耕善

病みつれどタラワ、マキンの玉碎
に生きなむとする願ひ切なり

北海道 花田 順往

徒らにくちばつるべき深山木も皇
國のためと今は世にいづ

栃木縣 大輪 清

強き身に強き心をはぐくみてみ空
をまもる兵の眞心

滋賀縣 鶴飼 愛

出陣の君に捧ぐる文なれば熱きこ
の身の血をもて書かむ

秋田市 妹尾馬之助

七十路の春はあひてもさめやらぬ
己が心のあさましきかな

投稿規定

官製ハガキ一則二首以内淨土
新聞部歌壇係宛に送ること

切かゝることはさせな
いと誓つた。そして虚
言は申さぬと云つて次
の條々を約束した。

一、今年貢先納、先

々納まで申しつけしは

御勝手不如意なりしよ

り御内證をよく存じた

る役人の止むを得ぬ仕

儀なり。向後は當年貢

の外、先納申しつけま

じ。御用金一切申しつ

けまじ。

一、年貢未進者は言語

同斷、かゝる未進者を

捨置ける役人も不埒な

り。然れども未進する

といふはよくよくの事

清あるべし。甚だ不便

千萬、役人も物無きを

知りて容赦し置きたる

ものなり。元來無きも

のなれば差出す手段も

あるまじ。御取りなさ

らぬは御上の御損、上納せぬは其方共の得にし
て只今までの未進の分はそのままにせよ。その
代り、當年貢は一粒も未進相成らぬぞ、きつと
上納仕るべし。得心せぬものは曲事に申しつ
くるぞよ。

一、先納、先々納致せし者へは返済すべきなれ

ど未進の分を呉れてしまひければ返済出来ぬな

り。依つて只今まで先納したる分は御上の取得

にして其方共は出損にしてくれよ。こゝが皆へ

の無心なり。

一、御用金差上げ 候者へはこれまた返済いた

し度ものなれど、知りたる通り元來無きものな

れば只今かなはず。人々の身代、只今相應にて

も、不仕合せなれば子孫に至り貧になるべきも

知れぬものなり。萬一左様の節は元金にて子孫

へ下され候。やうに計ふゆゑ、子孫のため、元

金にて殿様へ預けて置いたと思つてくれよ、こ

れまた皆への無心なり。

情理を盡した提言である。一同はありがたく

おうけして歸村した。

木工は革新の實行に當つて、當初に決斷した

自己の信念を誰憚る所なく振舞つて行つたが、

すべての協和を必要とする時代に他を責める態

度を少しも見せなかつた。それまで私利に没頭

してゐた役人達は、いつ木工の手が自分達の首に一新した。にかゝるかとはびくびくしてゐたが、彼が一向それらしい舉動を示さないので不思議がつた。しかしいつか彼等も木工のやうに正直に諸役勤めをしなければ藩籍にあることのできない状態になつてゐるのを知つたのである。云はば木工の行爲が自然の感化を垂れたのである。のみならず、木工は庶民に向つて、家業油断なく出精すべし、家業を疎かにする者は天下の大罪人なり。」と嚴命する一面、その餘力があつたなら分限相應の樂しみは苦しくないとしてゐる。それに淨瑠璃、三味線を擧げてゐるが、勤勞に持久力をもたせるための思ひ遣りだ。「總じて人は分相應の樂しみなければ又精も出し難し。これに依つて樂しみもすべし、精も出すべし。さて又、神佛を信仰する心なき者は災難多きものなり。依つて神佛をよくよく信仰して現當二世を祈るべし。」と云つてゐる。

かうした木工の職身の努力は歩一歩效を奏して行つた。木工の就役五ヶ年、藩の財政もすつかり建直り、領分豊穰に、庶人の生活も面目を



從來兎角の風評あつた家中でも、子供達が卒先して規律ある生活をはじめたので無駄といふ

れより半時鐘、半時或は鐘、それより書物を讀み、八ツ時より七ツ時まで休息す。七ツ時より鐘の稽古、夕飯後より四ツ時まで講。これに依つて松代の御家中は子供衆まで諸藝に達し、幼少より馬を乗り候由。遊ぶ間これなき故、博奕がましき惡しき慰みは一向なく、無益の物入りこれなき故、有難きことどもなり。」と記されてゐる。

木工の信心については面白い逸話がある。木工自身日課念佛は怠らなかつたが、折々歸依僧が訪れると、長く自家に留めて饗應するのが常だつた。といふのは、家内中に平生飯と汁よりほか食させなかつたので、來客のあるときだけ相伴として皆に菜を振舞つたのである。だから客のあるときは家内中の悦びだつた。僧の相伴は木工殿一人、家族家來には魚鳥を澤山用ゐ、座敷三菜ならば下々まで三菜にして食せよと毎度云ひつけられ……これなどは木工の、上に立つ者としての苦勞人振りを遺憾なく發揮してゐる。

「君、君たれば、臣、臣たり。實に有難き仁政なり。」これは眞田幸弘と恩田木工に寄せられた世の讃仰の言葉である。

信仰相談 (質問歡迎) 擔當 中村辨康

工員鍊成に

念佛を活かしたいが

(問) 小生は某工場の厚生課に勤く者ですが、先般工員

の鍊成を行ふに當つてその指導方法をたづねられました。私は以前から淨土の會員として貴誌を拜讀して居り鍊成指導には是非共念佛を活かしたいと苦慮して居ります。が、まだその成案が見付かりません。小生一個の場合と、かう云ふ何も信仰の話を開いたこともない工員達一團のものを相手にする場合とはまるで勝手が違ひまして小生の微力では何うしやうもありません。先生、日夜増産に追はれて居る我々工員達が一團となつて鍊成しようとする場合、どのやうにしたらお念佛を活した鍊成が出来る

ますでせうか。一案でも結構です。から誌上で御示し下さいませんか。せうか。之れは獨り私丈のことでなく、多くの念佛者が同じ問題で苦しんで居るのではないかと思ひますから。(川崎・村田幸次郎)

(答)

念佛に對する從來の先入観があるために中々むづかしいことです。従つて一度や二度の鍊成で目的を貫徹する筈もありませんし、また貴君の上役の人々例へば課長とか部長とか常務とか云ふ人達の諒解を得ることさへもが一通り二通りの説得で出来る筈ありません。ですからそれには何うしても他の力を借りなければならぬのです。例へば鍊成道

場を淨土系統の御寺にするとか、指導者に人格の高い然も社會的地位のある念佛を生命として居るやうな人を得るとか、さう云つた條件が備はらなければいけません。然も此の二つの條件が具備して居ても、その會社工場の好意ある諒解と熱心とが必要ですし、講師やその他の指導員や世話係の人々の共鳴も必要であらうと思ひます。

工員に對しては、以上の條件さへ備はつて居れば行きなり「念佛」をぶつつけてもいいと思ひます。即ち、念佛で講話を聴き、念佛で食事をし、念佛で起き、念佛で寝ると云ふやうな終始一貫その鍊成期間を念佛行事の中に生活させてよいと思ひますが、それにしても一度や二度で念佛の信に入る筈はありませんから、その中から若干のよい人を選んで特別の指導をなし、その人達を工場の中に適當に配置してその期間の訓練を日々

作業の中に施しつゝ、更に改めて鍊成道場での訓練を行ふやうにしなければなりませんでせう。

何と云つても平生が大切です。平生の訓練を怠つて置いて、一日一夜乃至三日三夜等の短期の鍊成で目的を貫徹しようとしても、さう甘くは行かないであらうと思ひます。

ことに重役級の人は明治大正にかけての米英的教育を受けて來た人々ですから、信仰にはむしろ縁のない人と言つてよいです。偶々信仰を持つてもそれは功利的であつたり、物質的であつたりして、本當の信仰ではありません。大體自分に求めようと云ふ氣がないのですから、お話を聞いても容易には理解して呉れません。随つてあなたの御要求は大體難中の難事であらうと存じます。然らばそれでは泣寝入りに斷念しなければならぬかと云ふに、決してさうでもありません。假令出

來難く思はれやうとも何處迄もやり遂げる決心を以てやらなければならぬことですし、やることに依つてその工場の能率もあがり眞實の忠誠心も確立するのでありますから、眞に國恩に報答せんとする熱意のある限りどこまでも遂行して頂きたいものです。出来易いことならば自分をまつまでもなく誰でもやつて呉れませう。出来難い故にこそ何處までも自分がやらねばならないものと思ひます。しかもあなたは内部の厚生課の人として有利な地位に居られるのですから、外部の人よりもズツとやりよいでせう。然もこれは長期戦を覚悟しなければなりません。端的に氣短かにやつても駄目でありま

す。漸次に事をすゝめて行かねばなりません。

そこで考へられるのはその第一歩を無論平生に置かねばならぬと云ふことであります。ですから先づ此の戦争に勝ち抜く爲の兵器を

作るのではありませんから、自分達の作つた兵器が本當に有効に働いて呉れるやう、その仕事を拜み、その成品を拜むやうに仕向けることが先決であります。

これは誰にでも合點の行くことであります。仕事に祈り成品に祈るのは、日本人である限りやらねばならぬ至情であり至誠心の發露であるからであります。然も之は容易ながら多く實行して居りません。然し現場監督の人に話込めば屹度出来ることとあります。

朝出勤した時先づおがませるのです。そして朝禮の時もおがませます。職場に就くときもおがませます。おひるを頂くときにも拜ませます。仕事を終つて歸るときにも拜ませます。成品を荷作りして工場から送り出すときは尙更拜ませます。之れは現に愛知縣で實行して居ることとあります。平素この訓練が出来て居れば改めて鍊成道場を開く必要もないぐらゐであ

りますが、この訓練の出来て居る工員の鍊成に初めて念佛をすゝめることが極めて容易であらうと思ひます。

この過程を経ずにいきなり「念佛」をすゝめようとしても、あちこちにさわりが出来て容易には出

幢 幡 と 云

ふ も の

(問)

お寺に銅版といふ長い金色のものが上からさがつてゐますが、その意義や起源等御教示願ひます。(東京・伊桁邦元)

(答)

幢幡のことと存じます。が、幢幡は讀んで字の通り幡でありますが、幢即ち「はた」とをいふこと、幡即ち「はた」とをいふ緒にして六角又は八角に仕立てたものを言ふのであります。幢の方は王様の儀衛や大將の指麾に使用したもので、それを佛は魔軍を降伏せしめると云ふところから説法のことを一に「建法幢」などと言

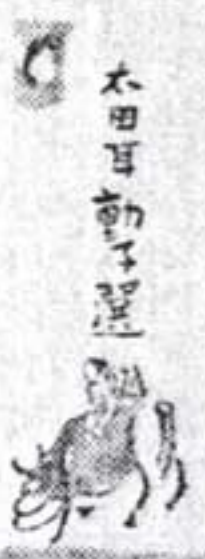
來ませんでせうし、よし假に出来たとしてもそれは一時的のものであつてすぐ忘れられてしまひませう。

これを實行して見て、若し支障があつたらその時また御相談願つたらよいと思ひます。

ふやうになつたのです。それを佛菩薩の標幟としたのであります。幡の方は旗の總稱で、之は佛菩薩を供養莊嚴する意味に用ひたものです。この幢と幡とを合せたものが即ち「幢幡」で、一種の「かざり」であります。何時頃から出来たものか存じません。幢や幡は釋尊時代にあつたことは確かです。

送金に振替を御利用の際は、必ず十銭増しでお願いいたします。拂込料金は當方から局の方に支拂ふ様に變りました。

俳 壇



太田耳動子選
京都市 福島孝治郎

鶏の命をかけて高鳴ける
名古屋市 堀場 典雄

薪割れば啓蟄の土躍るなり
弘前市 安田 武

紅梅の門をいで征く吾子おくる
館山市 小宮 蒲柳

仙人に芹と雉子とを貰ひけり
高 知 平野 雪女

強東風の壇の中なる花菜かな
高 知 竹原 敦圓

濱うらら面テも上げずまろびをり
京都市 永田 七郎

諸ひつゝゆくや菜種の花畠を
北海道 山下 弘壽

林泉の陽さぐりて鳴きぬ雀の子
京都傷療所 松村 城南

義足の兵遅く来て来たり梅の句座
岡谷市 久保田 稜

朝禮のベル鳴り春の朝静か
京都市 正木林之輔

酒の粕あまざけにして飲まんかな

春雷や厨につみて疎開の荷
東京都 萩原 通孝

目のあたり雲涌き春の大銀杏
東京都 山本 竹泉

春曉の富士にたゆたふ雲愛し
山 梨 鈴木長春園

柳の芽鵲の川原に吹き流る
京都市 竹内 修吾

鳴飛ぶ荒磯に春日輝けり
明石市 山本多可子

沈丁花お香のやうにたゞよへる
名古屋市 山田 順證

菜の花のかたへにひねもす絲垂る
東京部 坂口 康夫

岩國市 長岡 白朝

揚船の横腹強く東風吹けり
長野傷療所 堀 純雄

早春の光を戀ふて集ひけり
舞鶴海兵團 齋藤 耕善

南風に靡く芭蕉や月上る
栃 木 大輪 清

花曇音より早く飛機すぐる

投稿規定 句以内淨土編輯部俳壇 係宛に送ること

小銃彈

中野 尅子

□ 悲しい事、苦しい事、腹立しい事、悔しい事……是れ皆人間完成への一歩……だ。怒つちやいけない、氣永に往かう、事毎に感謝して。

□ 苦勞して損をスル——斯ういふ面白味が人生にはある。いつも樂して得スルつもりではいかぬ

□ 月給のコートを云つてゐる奴は、その月給だけの値打もない奴だ。月給に目もつけず働いてゐる人間なら、必ず、月給を殖さんならぬ。

□ 叱る前に、先づ同情せよ。

□ 誤つたら改めるバカリだ。改めるまでは堂々とやれ！

□ 金が出来たら、一層徳を磨け、中味の徳が足らぬと轉覆する。

□ キツイけれ共やさしいからいい。大膽だけれ共細心だからいい。「反対性」を持たぬやうな人間は「うまみ」が無い。

□ 信ぜられぬで苦しみ、信じて苦しみ、信を行じて又苦しむ。信は「苦しむ」ことだ。

□ 年を取らぬ方法は——ウソを云はぬことだ。

□ 皆、成功を急ぐ、そして一番成功におくれた者が、却つて成功者だ。

□ 飄めそうな間だけ「幸福」であつて、飄んだら皆「幸福」でなくなる。

□ 人に勝つのに六づかしい事はない——負けておけばいい。

□ 人間は、つまづいて初めて眞剣になる。

□ 小石一つでも、地球の外へつまんで捨てる事が出来ますか、此の世には要らぬ物とては一つも無い。

□ よく賣れるものは、大抵、二流品だ。

□ 八方美人は、八方から嫌はれてゐることも知らぬ。

□ 成功を急ぐ、そして一番成功におくれた者が、却つて成功者だ。

□ 飄めそうな間だけ「幸福」であつて、飄んだら皆「幸福」でなくなる。

□ 人に勝つのに六づかしい事はない——負けておけばいい。

□ 人間は、つまづいて初めて眞剣になる。

□ 小石一つでも、地球の外へつまんで捨てる事が出来ますか、此の世には要らぬ物とては一つも無い。

□ よく賣れるものは、大抵、二流品だ。

□ 八方美人は、八方から嫌はれてゐることも知らぬ。

□ 成功を急ぐ、そして一番成功におくれた者が、却つて成功者だ。

□ 飄めそうな間だけ「幸福」であつて、飄んだら皆「幸福」でなくなる。

□ 人に勝つのに六づかしい事はない——負けておけばいい。

□ 人間は、つまづいて初めて眞剣になる。

□ 小石一つでも、地球の外へつまんで捨てる事が出来ますか、此の世には要らぬ物とては一つも無い。



或る日の法悦

法然上人法語解説(其二十九)

中村 辨 康

法語

ある時、鎮西の聖光房と聖覺とたゞ兩人、上人の御前にて淨土の法門(を)聽聞しける時、聖光房尋ね申して云く、仰いで本願を信じ實に往生を願すれども、妄念鎮ふるに起きて止みがたく、散亂いよいよ倍して靜かならず、この條(を)如何(心得)候(べき)や。

上人答へて給はく、妄念をもちへりみず、散亂不淨をも言はず、唯だ口に名號を唱へよ。もし能く稱名すれば佛名の徳として妄念おのづから止み散亂おのづから靜り三業おのづから調ひて願心おのづから發るなり。然れば願生の心の少きにも南無阿彌陀佛、散亂の増す時にも南無阿彌陀佛、妄念の起る時も南無阿彌陀佛、善心の起る時も南無阿彌陀佛、不淨の時も南無阿彌陀佛、清淨の時も南無阿彌陀佛、三心の闕けたるにも南無阿彌陀佛、三心具するにも南

無阿彌陀佛、三心現起するにも南無阿彌陀佛、三心成就するにも南無阿彌陀佛、これ即ち決定往生の方便なり。心腑に納めて忘るゝことなかれ。

聖覺尋ねて云く、今の御義の如きは三心を闕くいへども唯だ佛名を稱ふれば名號の徳として三心發得して往生すべしと聞へ候。然るに(善導)和尚(は)虛假心の行人は晝夜十二時に急になすこと(宛も)頭燃を拂ふがごとく勇猛に勤行す(る)とも往生は不可なりと定判したまへり。彼此の御義如何が合せんや。聖光房の云く、予が所存も亦たしかりと、上人答へて曰く、この不審は今の所談に非ず。これは本より三心を具すれども、展縁對境の時に如法ならざる(場合に於ける)その治方を述ぶるなり。引くところの(善導)和尚の解釋は一向に三心の闕けたるを嫌ふ(ものであつて)意趣もとも巧みなり。(今問題にして居るのは心が散亂して妄念の起つて居る時の念佛をどうしたらよいかと云ふ

ことであつて、未信仰の者に三心を勧説する場合とこれとを混同してはいけない。この故に難にあらずと仰せられければ、弟子等兩人ながら、信仰の餘りに申し述べん詞もなく唯だ一同に「阿」と言ひき。(十六門記法語抄一四一、二)

解説

東山三十六峯も霞につゝまれつゝ春暖の日さしが座敷の中まで長閑に照らして居ります。

今日は如何したとか。いつものやうに訪ねて来る人の影も見えず、お弟子達も亦た何處へ行つたのか、聖覺法印と鎮西の聖光上人と唯だお二人だけが、上人の御部屋で靜かに清談を續けて居られるのでした。

聖覺法印と云ふ方は、かの少納言入道信西の弟に安居院の澄憲法印と云ふ人がありますが、その實の子でもあり、法の弟子でもあり、辯舌に堪能な人で、その點に於いては法然上人の片腕ともなつて居られました。公卿出の名門でもあり貴公子でもあり、誠に諍々たる門下生でもあつたのでした。

また聖光上人は鎮西の豪族香月氏の出身で、叡山ではその頃唯一の學者で一切經を十六返も讀んで源平の争亂をさへ知らなかつたと言はれる證眞法印のお弟子となつて居られました。出離の志深く遂に法然上人を訪ねてその門

下に加はり、後に淨土宗の第二祖と立てられるまでになつたお方でもあります。

門下の中でも特に勝れて居るお二人を相手にして信仰談をなされつゝあるその光景は實によそ目にさへ羨ましい程であつたに相違ありません。

お話が一とくぎりになつたと見えまして、聖光上人がお質ねいたしました。

「御本願の有難さを信じ此の度こそはと淨土への往生を願つてお念佛にいそしんで居りますが、おさへようとすればするほど妄念がむらがり起り、心が散亂騒動して愈々益々靜かになりませんので、實に閉口して居る次第でございますが、これは如何心得たならばよろしうございませうか」

「妄念餘念の起るのを氣にかけてそれにこだはつて居てはなりません。心が散亂しきたない考へが起るのは人間の常でありますから、それをなくしてと考へることは更に妄念餘念を多くすることにもなる譯です。ですからさう云ふことを願みずに、唯だ口だけでもよいから頻りに名號を唱へることがよろしいのであります。かく一心に念佛して居りますと、やがて佛名の徳としておのづから妄念が止み、おのづから散亂の心が靜まつて、身口意の三業が調和して参り、自然に往生を願ふ氣持が強くなつて來ます。そりなれ

ば三心が現起し三心が成就して心にはつきりと確證をにぎることとも出来すから、散亂が増す時でも、妄念のむらがり起る時でも、願心の起らない時でも、不淨心の起つて居る時でも、三心のかけて居る時でも、そんなことにかまはずに南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と唯だひたすらに唱名念佛することが唯一の手段であります。是れ決定往生の爲の最も正しい方法でありますから、よく／＼心腑におさめて忘れることのないやうにして下さい」

これを承つた聖覺法印は不審をおこして

「唯今のお話でございまして、三心が缺けてもお稱名さへして居れば名號の徳で自然に三心發得して往生が出来ること云ふやうに承りましたが、善導大師の勸經疏に依りますれば、三心の闕けたものは晝夜ぶつ通しに一生懸命に念佛しても往生は出来ないと云つて居られます。さら致しますとお説が二義になつてそれとこれと合はないことになりましかとも存じますが、如何考へたらよろしうございませうか」

聖光上人もその言葉につれて

「私も聖覺法印様の不審と同じやうに思ひました」

すると法然上人は

「その不審はまた問題が違ふのであります。あなた方は問題を混線させたのでさう思はれたのでありませう。善導大

師の仰せられたのは一向に三心の缺けた人の場合を言つて居るのであります。然るに今私が申したのは本より三心を具へて居るけれども、人間の心は縁に觸れ境界に連れて散亂騒動し、或は願心が起らなかつたり、或は至誠の心にならなかつたり、或は信心が薄れたりして居る場合にどう心得たならばよろしいかと云ふ「治療方」を述べたのであつて、つまりは自然に餘念妄念が靜まり正念が續いて我が本心から満足する程のお念佛が出来るコツを申したのでありますから、その批難は當らないのであります」

と、誠に明瞭な御答がありましたので、お二人も餘りの有り難さに信心肝に銘じて申し上ぐべき言葉もなく、思はず兩人共に異口同音に

「阿！」

と言つただけでありました。承るだに誠に有り難い極みでございます。

御高覽ずみのいらなくなつた「淨土」を一部でも多く白衣の勇士方へ、毎日多數の御寄贈を頂き、有難く感謝いたしてゐます。又御返送の郵税は一部—三部まで二錢、以下百冊につき二錢増ですから御承知おき下さい。

名芳所住御

中村辨康著

新刊 信仰問答

賣價三圓十五錢
送料 廿四錢

「浄土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りた難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰案内書です。問ふものの切實な悩みや疑ひに對して親身に懇切に指導してゐます。

郁芳管長猊下名號御執筆

浄土宗日常勤行式

頒價八十五錢（送料共）
折本、縦五寸五分、横二寸五分
本文二號活字、總假名ツキ、特に一般信徒用として編纂されたもの。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇吉田絃二郎先生は相變らず御健勝にて何かと御指導を頂いてます
◇岡本一平先生は遠地に疎開なされ、玉稿が間に合ひませんでした
◇眞野正順先生は新設の浄土宗教學院研究所長になられ、多忙を極めてをられます
◇辻重光氏は公用で北滿から内地に歸られ忙しい中を元氣な姿を見せてくれました

◇赤尾光雄氏は北支某部隊附となり、得意の支那語で活躍中です

◇道瀬幸雄氏は今度朝鮮某軍需會社に轉出せられ、同社東京關支所長として發足されました。しかし當所とは引續き連絡をとつて御教示下さることになつてゐます

◇このところ發刊が遅れて申し譯ありません。何うにも日時がとりもどせませんので、近く二冊を殆んど同時に刊行したい心算であります。何卒御寛容下さい。（村瀬）

浄土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年四月二十日印刷納本
昭和九年五月一日發行

（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
（東京一）
印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「浄土」購讀規定

定價 金十二錢
（送料二錢）

（送料共）

會費 金一圓六十八錢
一ヶ年

振替掛込みはすべて十錢増のこと